遺族の友

発行所
一般財団法人滋賀県遺族会
滋賀県大津市におの浜4丁目2－34
滋賀県遺族会館
電話　(077)522-7227
FAX　(077)522-7233
発行責任者
滋賀県遺族会長
松井　尚之

会長に松井氏三選

一般財団法人としてスタート

3月21日、滋賀県遺族会は理事会・評議員会を開催し、松井尚之会長の3選とともに新任役員を選出した。さらに、公益法人制度改革にともない平成24年4月1日付で一般財団法人滋賀県遺族会として新たなスタートをきった。

▼2面＝新任役員あいさつ、3・4面＝遺族会役員名簿

3月21日、滋賀県遺族会は理事会・評議員会を開催した。会議では、平成24年度の活動方針・事業計画（案）、新しい法人の定款変更（案）や定款細則（案）、規程（案）などを審議し、承認された。今年度は役員改選期にあたり、副会長、部会長、副部会長、委員長、副委員長などの役員が選出された。平成23年5月の理事会で新しい法人への移行を決定し、滋賀県の認可を受けるべく事務処理を進め、平成24年3月23日付けで滋賀県の認可通知を受け、平成24年4月1日付けで新しい法人の設立登記を行い「一般財団法人滋賀県遺族会」として新たなスタートをした。なお、会長は新しい法人移行のため平成23年5月の理事会で決定することが求められ、新しい法人の定款附則3で「この法人の最初の会長は、松井尚之とする。」として承認されていた。

滋賀県遺族会の松井尚之会長は、平成20年度に山田利治元会長から引き継いで就任し、今期は3期目の就任となる。松井会長のメッセージと新任の滋賀県遺族会副会長5氏から抱負が寄せられた。

（広報　竹井昌夫）

会長メッセージ

松井尚之会長

理事会におきまして、前期に引き続き滋賀県遺族会長の重責にご推挙いただき、非才な私でございますが一生懸命頑張る所存でございます。

前期は、公益法人制度改革により、滋賀県遺族会が公益財団か一般財団のいずれかに移行することが求められ、種々検討を重ねた結果、一般財団法人としてスタートすることとなりました。滋賀県当局のご指導をいただき、3月23日認可通知を受け、4月1日大津地方法務局に設立登記を行い、名実ともに新たな法人「一般財団法人滋賀県遺族会」が発足いたしました。法人区分は変わりましたが、遺族会の目指すものに大きな変化はありません。遺族の福祉救済および相互扶助、戦争の歴史に触れ、戦争の悲惨さや幾多の尊い犠牲のあったことの認識、恒久平和の確立、すべての人々の福祉に貢献等々遺族会の目的は不変であります。

しかしながら、これらの目的を達成するための事業展開に際しましては様々な課題があり、遺族会員の高齢化はその大きな一つであります。

私たちが永年念願しておりました「滋賀県平和祈念館」が3月17日東近江市に開館されました。戦争の歴史を正しく伝え、戦争の悲惨さ、平和の尊さを広く知っていただく場として、また、平和教育の発信基地となることを願うものであります。特に、次の世代を担う子どもたちが学ぶ場として大きな期待をしております。

滋賀県遺族会では、新たな法人の定款に、21世紀に生きる若い世代が戦争の歴史に触れることを目指し、これを達成するため、次世代の戦跡訪問研修に関する事業を行うことを表しました。また、平和祈念館の運営等は滋賀県当局が進められますが、施設内の整備促進、各種事業展開に際しましては遺族会の役割がいよいよ大であると確信しております。具体的には、平和祈念館対策委員会を組織化し、滋賀県との連携を図っていく所存であります。

滋賀県遺族会の平成24年度主要事業計画も評議員会・理事会で承認いただき、新たに就任いただきました各部会、委員会役員みなさんのご協力のもとに事業展開を行っております。県下各地遺族会におかれましてもそれぞれ独自に事業をスタートされているものと思いますが、滋賀県遺族会事業へのより積極的なご参加と、滋賀県平和祈念館を拠点とする事業へもご家族お揃いでご参加くださいますようお願い申し上げます。

滋賀県平和祈念館開館

新たな「平和の燈」灯し始めた

上 嘉田由紀子滋賀県知事から感謝状を受け取る松井尚之会長　下 平和祈念館玄関前でテープカット（右から2人目が松井会長）

滋賀県遺族会の永年の念願であった「滋賀県平和祈念館」は県民の戦争体験を語り継ぎ、平和を願う心を育む施設として、東近江市下中野町の旧愛東支所を改修、整備し、3月17日に開館した。

愛東コミュニティーセンターホールでの開館記念式典には遺族ら500人が出席し、「あいとう若鮎太鼓運営委員会」の和太鼓、「誰でもおいでよふるさとハーモニー」のコーラス歓迎演奏に続いて、嘉田由紀子滋賀県知事から主催者挨拶があり、佐野高典滋賀県議会副議長、西澤久夫東近江市長から祝辞が述べられ、開館祝福のため出席された国会議員や滋賀県議会議員、市町長など多くの来賓が紹介された。平和祈念館事業の成功に寄与したいと広く県民に寄付金募りを呼びかけ、多額の浄財を寄贈した滋賀県平和祈念館設置県民募金実行委員会に知事から感謝状の贈呈が行われ、松井尚之滋賀県遺族会長が代表して感謝状を受け取った。

引き続き、滋賀県平和祈念館玄関前では、地元愛東南小学校の和太鼓演奏や愛東北小学校の「平和のうた」合唱に合わせてテープカットが行われた。滋賀県知事、滋賀県議会副議長、東近江市長の皆さんや滋賀県遺族会からは松井会長、山田利治顧問が代表してテープにハサミを入れ、玄関扉が開き、代表の皆さんと共に式典参列者全員が平和祈念館への入館となった。

平和の燈を灯す杉江部会長

1階エントランスロビーでは、平成12年の大晦日に、21世紀が平和の世紀になることを願って滋賀県遺族会が県内各地の火を集め、「平和の燈」として滋賀県護国神社に灯し続けてきた火と、滋賀県平和祈念館の開館を記念して、地元愛東地域の子どもたちが平和への願いをこめておこした火を集め、杉江周作滋賀県遺族会英霊顕彰部会長、地元愛東北小学校6年生、愛東南小学校6年生代表により「平和の燈」継火式が行われ、一つの火となってシンボル展示「平和の燈」に火が灯された。

平和祈念館前庭では、地元愛東中学校生徒会代表と滋賀県平和祈念館ボランティア代表により、広島市内の学校で生き残った「被爆桜」からとった苗木（広島被爆桜二世）を記念植樹した。

「被爆桜二世」を記念植樹する愛東中学校生徒会代表のみなさん

1階展示場では、東近江市にあった陸軍八日市飛行場で回収された戦闘機の残骸や空襲で大津市に落とされた爆弾の原寸大の模型、信楽焼の手榴弾などとともに召集令状の赤紙、戦地に赴いた人たちが家族にあてた手紙などが並べられ、参列者のみなさんは食い入るように鑑賞しながらボランティアガイドからの説明を聞いていた。

「滋賀県平和祈念館」を拠点として、次世代が正しい戦争の歴史認識を養い、恒久平和の確立を目指すよう遺族会がどう関わっていくかの新たな課題がスタートすることとなった。

（広報　雨森久昭）

平成24年度新任役員就任あいさつ

初のフィリピン戦跡巡拝の感動を忘れずに

副会長　川嶋之生

このたび、滋賀県遺族会の副会長の大役を仰せつかり、浅学非才の身でありながら、その責任の重大さを痛感しております。今から30余年前、初めてフィリピンの戦跡慰霊に参加させていただき、父の眠る地に踏み入れて、その感激、感動は今も忘れることはありません。これを機に遺族会活動に諸先輩の方々等のご指導を受けながら取り組んできました。同じ境遇の県内各地の方々とご交誼をいただき、すばらしい組織であり一回りも二回りも大きく育ててもらいました。

先の大戦が終結して67年が経ち、今日の平和の礎となられた英霊のことを決して忘れてはなりません。待望の平和祈念館が3月に開館し、その施設の役割が注目されています。遺族会としても新たな発展を目指さなければなりません。

戦後の苦しかった時を経験した私たちです。これからは、より安心できる社会の構築に向け、この歴史と伝統ある遺族会に微力ながら力を注ぐ所存です。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

お母さんたちの心をしっかり受け止めよう

副会長　的場恵美子

今まで次世代戦跡訪問事業の担当副委員長として8年間携わってきましたが、この度、日本遺族会女性担当代表の副会長と女性委員会委員長をお受けすることになりました。

戦後の混乱した時代、戦争未亡人として夫の死を悲しむ余裕もなく、幼い子どもを抱えて日々の生活に追われながらも、夜行列車に乗って「福祉の向上」や「処遇の改善」等々、国を相手に掛け合い、陳情して戦没者遺族の国家補償を訴え、小さな声、小さな集団から、全国的な組織にまで作り上げ頑張ってこられたお母さんたちの心を、私たちがしっかりと受け止めたいと思います。

会員が減少しつつある今日、どのように後継者の育成に努め次の世代に伝えていくか、また、社会奉仕活動をどのように進めるか等、課題が多いなか、私には荷が重すぎますが、皆さまのお知恵をいただきながら微力ではございますが、与えられた役を果たせますよう、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

行政主催の戦没者追悼式の実施を

副会長　藤澤喜八郎

今年度の役員改選により、突然に、ブロック理事でしかも滋賀県遺族会副会長の要職を拝命し困惑しています。今後の遺族会のあり方については、会員の高齢化が進み、この先、現状のまま続けていくことはとてもむずかしく大きな課題であります。

永年の懸案であった「県立平和祈念館」が3月17日にオープンし、戦争を知らない多くの世代の人たちに戦争の悲惨さや虚しさを目で見て、戦争は如何に無益なものであったかを感じとってもらいたいと思っています。

また、英霊顕彰担当副会長の立場から、「もう50年以上経ったのだから慰霊祭等は止めてはどうか」との意見を耳にしますが、戦没された英霊は、当時の日本国政府から赤紙一枚で召集され、お国の為にと尊い命を捧げられたのです。つまり、日本国政府に殺戮されたと同然であり、国は勿論のこと、それぞれ県及び市や町において永久に戦没者に対しての追悼式を行うべきであると訴えます。

東近江市においては今年度から毎年7月第3土曜日を、市主催による「東近江市平和祈念式」として戦没者追悼式を行うことと決定されました。他の市や町においても、早期にこのような形で戦没者追悼式が行われることを期待しながら遺族会活動に取り組んでいこうと思っています。

「会員の減少と高齢化」を踏まえて諸活動をすすめよう

副会長　井上秀次

新年度の役員改選で、企画部会担当副会長に就任しました。

所掌は、企画・次世代活動・平和祈念館対策・女性の各委員会で、事業執行の窓口として参画させていただきます。

さて、4月から一般財団法人として再スタートした遺族会ですが、会員の減少と高齢化という大きな現象が目の前にあって、諸活動はこのことをしっかり踏まえて進めることが必要だと思っています。国の繁栄の礎となられた英霊の顕彰は全ての事業執行の基本です。3月に開館された平和祈念館を核に、平和と戦争の史実を、世代を超えて人々にしっかりと伝えることは私たちの責務であることを忘れず、至らない点をご指導いただきながら勤めたいと考えています。よろしくお願いします。

遺族会仲間は大切な財産

副会長　木津美智子

深緑の候、会員の皆さまにはご健勝のこととお慶び申し上げます。このたび、平成24年度滋賀県遺族会副会長の重責を任命され着任させていただきました。元来、浅学非才であり、皆さまにはご迷惑をおかけするのではと案じておりますが、会員皆さまの英知をお借りしながら、微力ではありますが、遺族会発展のため努力する覚悟でございます。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、私が初めて本会に参加させていただいたのは、昭和59年フィリピン戦跡巡拝にお誘いを受けた時からです。父とは生まれて一ヶ月で別れておりますので思い出もなく、写真だけの父は、遠いとおい存在でした。しかし、父の最期の地、フィリピンの上空に飛行機がさしかかったとき、思わず「お父さん」と呼び「ごめんね、こんなにも遠いところまで来てたのね」と、積年の涙がとめどもなく流れ出たのを今でも思い出します。その翌年あたりから県遺族会活動を知り、徐々に参加させていただくようになりました。父が命の代償に残してくれた遺族会のお仲間が今では私にとって大切な財産となりました。

幸いにも本年3月17日、悲願でありました「平和祈念館」がオープンいたしました。会員皆さまから預託されている貴重な資料や遺品等が展示されています。あらためて当時のことを思い起こしていただいて、体験を風化させることなく次世代に語り継ぐのも私たちの役割と思っております。

今後とも皆さまのご協力をお願い申し上げ、末筆ながら会員皆さまのご多幸をご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

広報委員会　彦根東高校新聞部に学ぶ

彦根東高校新聞部と意見を交わす広報委員

新聞発行ではそのレベルの高さが評価されている伝統の彦根東高校新聞部を訪問した。平成24年1月には、「高校新聞の甲子園」と言われる全国高校新聞コンクールで全国高校新聞教育研究会賞を受けた同校である。

2月14日、授業の終了を待って彦根東高新聞部を訪問。既発行の新聞をいただく。「これが高校生の新聞？」と、先ず驚く。実に内容が豊富で読み応えがある。月1回4ページ版の発行を基準に、400号記念号は24ページ、それのみならずニュース速報として随時発行の速報版は年140部になるという。全国的新聞作成にも取り組みその意欲に敬服。「やりたいことは何でもやろう」の取り組みでユルキャラ「ぎんにゃん」もつくり文化祭を賑わせたとか。

新聞発行に当たっては客観的な立場で人の意見を載せることを基本に、意見の異なる主張は対立意見も載せ、同じ面積を占めるよう配慮しているとのこと。最終的な責任は新聞部が持つとも。

ユニークなのが新聞に広告が掲載されていること。広告を取るのも新聞部の仕事だそうだ。しっかりとした理念を持ち、的確な部長の受け答えに感服すると共に応援したい親心もわいた。ちなみに「遺族の友」についての評価を尋ねると、段組、写真の説明など素晴らしいとのこと。やれやれ、ホッと一安心！

（広報　谷口晋子）

年に一度は靖國へ

第38回靖國神社参拝報告

「年に一度は靖國へ」を合言葉に受け継がれてきました第38回『靖國神社昇殿参拝旅行』は、平成24年3月4日～5日に実施され県下各地より500余人の方々が参加されました。

参拝する大津市のみなさん

1日目は靖國神社参集殿において、公私お忙しい中参加いただいた野田藤雄（長浜市）小寺裕雄（東近江市）富田博明（甲賀市）の県議会議員各位、自民党滋賀県第4選挙区武藤貴也支部長を迎えてのセレモニーに続き、神社昇殿においてそれぞれの思いを胸に英霊と語り、安らかなご冥福を祈念されました。

今回は久しく日本の戦いの歴史記録、英霊の遺書や遺品、英霊のまごころや事蹟を今に伝える貴重な資料が展示されている遊就館をゆっくり拝観。その後、一路群馬県に向かい「舌切り雀」の伝説が生まれた地として知られる「磯部温泉・舌切り雀のお宿」で日頃の疲れを癒し、限られたひとときではありましたが会員相互の親睦を深めていただきました。

靖國神社参集殿において催されたセレモニー

2日目は、一面雪化粧の中、上信越道群馬、長野県境を越え文豪・島崎藤村の詩「小諸なる古城のほとり」でも知られる「小諸城趾懐古園」散策と太平洋戦争末期に軍部が本土決戦最後の拠点として大本営、政府機関を移す計画のもとに構築された「松代象山地下壕」の見学と城下町散策、その後昼食とお買い物を済ませて二日間の参拝旅行を終えることができました。

ご参加いただいた会員の皆様並びにお世話になりました各役員の皆さまに紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

来年も元気で靖國神社の昇殿で、皆さまとのお出会いを楽しみにお待ちしております。

（祭祀委員会（靖國）委員長　奥野義明）

平和の尊さ有難さ忘れずに

今年も3月4日～5日、県内各地より500人余りの一同が靖國神社昇殿参拝と遊就館拝観、群馬県磯部温泉の旅へと行ってまいりました。遺族会員との親睦を深めることが出来ました。

新幹線で東京駅に到着後、観光バスにて靖國神社へ参拝、国会議員も靖國神社へ駆けつけて下さり挨拶と激励の言葉をいただきました。御霊に早くお会いしようと一斉に昇殿へ上がらせていただきました。毎年参拝されている人や何年か前に参拝されている人など、それぞれが家族の状況報告や家内安泰をお願いし、御霊に元気でお会い出来た喜びと感謝でいっぱい、胸が詰まる思いがしました。私たちの願いごとをいろいろ聞いて下さって、安らかにお眠り下さい。又来年もお会い出来ますように「年に一度は靖國へ」の合言葉で一人でも多くの方が参拝していただきますようご期待申し上げます。

靖國神社　社頭

最後に、平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになってきています。私たちは過去のあやまちを二度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。御霊にお誓い申し上げました。

（広報　北田潤子）

玉砕の御霊に呼びかける

サイパン・テニアン慰霊巡拝

平成23年度サイパン・テニアン戦跡慰霊巡拝が2月6日～10日に行われた。松井尚之団長（滋賀県遺族会長）以下21名添乗員1名。初日夕方JR京都駅集合。関西空港からアシアナ航空の深夜便でサイパン空港着。ホテルで仮眠、空港に戻り、セスナ機でテニアンに、7日にサイパンに戻って8日・9日は各所巡拝。10日の深夜起床、未明に関西空港へ、帰宅は朝帰り。

サイパン島、テニアン島は北緯15度に、面積はそれぞれ約100平方キロメートル、島間約5㎞、珊瑚礁隆起の火山列島。日本が第一次大戦で占領、支庁などを置き、南洋興発の砂糖黍産業と関連商業が栄えたが国策の帝国主義化に伴い、防・攻戦に備えハゴイ飛行場なども建設。

テニアン島日本人慰霊碑前慰霊祭で黙祷

第二次大戦に入り、2島に5万数千の兵を置くも米軍の増強した巨大な戦力に圧倒され、物資供給も絶たれ餓死などの果て玉砕した。東京空襲や原爆登載のB29はテニアンから飛んだ。また、焦土を覆うため樹の播種をして緑化。

この盛衰の多数の遺跡を巡り、慰霊祭を6回、追悼式を1回、親善の学校訪問1校。今回の巡拝に数人の孫世代の参加があったので良かった。当地は貴重な戦跡の外、盛んなマリンスポーツがあるが、一般の物見遊山と違う旅との理解を願う。

中部太平洋方面戦没者追悼式典参列の皆さん

（広報　田中清一）

祖父を近くに感じた

遺族会のみなさま、この度は、サイパン・テニアンの慰霊巡拝を計画していただき、何かとご準備いただきまして、ありがとうございました。今回参加させていただき、サイパン・テニアンの生々しい戦跡を目の当たりにし、貴重な体験をさせていただきました。

平和な今の時代から想像もつかない戦争という憎い出来事が祖父や日本の多くの若い命を奪ったかと思うと、本当に悲しくて悔しくて仕方ありません。

祖父の写真は、今では私より若く、残してきた妻、子供、親・・・を想い、本当に無念であったと思います。

私は、今回サイパン・テニアンに来て、祖父を近くに感じる事が出来ました。

慰霊祭で写真を見てお参りした時、話しかけられたような気がして、思わず微笑んでしまいました。サイパンから飛び立つ時には、「もう帰るのか」と、ちょっと寂しそうな声が聞こえたように感じました。

帰省してから、自宅から見えるいつもの山がタッポチョー山に思え、祖父のいるサイパン・テニアンが近くになったように感じています。

今回私は、この慰霊の旅を目前に体調を崩し、出発の前々日まで入院をしていました。一時はキャンセルも考えましたが、母の心強い支えもあり、参加する事が出来ました。これもお祖父さんが守っていてくれたのでは…と感謝しています。

テニアン島チュルビーチ（米軍海兵隊上陸地点）慰霊祭で「呼びかけ」の田中幸子さん

サイパン滞在中、私の父はホテルの窓越しに祖父の写真を置き、床に正座をして、毎晩欠かさずお経を唱えておりました。これは祖母が亡くなってから毎晩行っていることですが私はその後ろ姿がなんとも美しく、私は今、その父の背中を見ることが出来る、手の届くそばにいるそんな当たり前の事が出来なかった父と家を守り私と父を送り出してくれた母を大切にしていきたいと思っています。

最後になりましたが、70年近くの月日が経つこんにちまで、この慰霊祭を継続し、お参りいただいていたことに心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

（甲賀市　田中幸子）

次世代戦跡訪問研修

必死に学ぶ悲惨な沖縄での戦争を

沖縄方面

平成22年度に滋賀県遺族会の次世代戦跡訪問研修事業が10周年の記念として行われた沖縄方面次世代戦跡訪問研修は、平成23年度から毎年実施されることとなり、3月28日から30日の3日間、県内から小・中・高校生28名が参加した。

沖縄での戦跡訪問先は、ひめゆり平和祈念資料館、糸数アブチラガマ、陸軍南風原壕・南風原文化センター、首里城跡、対馬丸記念館等々である。昨年度は改修工事中であった平和祈念資料館では、眼前に展示資料を鑑賞しながら宮良るい先生から説明を受け、沖縄での戦争の様子を教えていただいた。昨年度、宿泊先のホテルまで来ていただいた島袋淑子先生（副館長）には、平成22年度旅の記録（感想文）冊子を手渡してお礼を述べた。

「近江の塔」慰霊祭では、団長の滋賀県遺族会岸田孝一副会長と参加者代表の白井真美さん（滋賀県立草津東高校1年生）が追悼の言葉を述べたあと、参加者ひとり一人が沖縄方面戦没者に献花を捧げ、全員で「ふるさと」を合唱しながら冥福を祈った。

今回も、参加者には携帯電話や装飾品などを装着しないこと、また、学生服に準じる服装での参加を厳しい条件での研修となったが、案ずることなく、全員が「悲惨な沖縄での戦争について」必死に学んでいた。

今回の思い出を何時までも忘れず、この世から「戦争」の文字を無くして平和な世界を作る人になってくれることが期待できる旅となった。

（次世代活動委員会前委員長　田中正徳）

研修に参加されたみなさん（近江の塔）

戦争のむごさ、平和の尊さを学習

鹿児島方面

日　程：平成２４年３月２５日（日）～３月２７日（火）
参加者：小学生３３名、中学生４名、高校生１名　計３８名
引率者：滋賀県健康福祉部健康福祉政策課主任主事
小河あずさ氏　１名
滋賀県遺族会副会長
中村武治（団長）ほかスタッフ　８名
合計４７名

早朝には雹が降る寒気のなか出発、大阪南港で「さんふらわあ号」に乗船するころには晴れてきたが、風強く、大きな船も少し揺れる。夜明けに志布志港に到着。以降、快晴に恵まれた。帰りは鹿児島空港から伊丹空港へ。

鹿児島県での平和学習は、沖縄戦に向け飛び立った陸軍航空兵の特攻隊の悲劇を通じ、戦争のむごさ、平和の尊さを学習することにある。

【主な見学地】

知覧特攻平和会館・・・陸軍特攻基地の中心である知覧から出撃した４３９名の特攻隊員の関係資料が展示。

特攻平和観音・・・・・特攻平和会館横にあり、ここで慰霊祭を行う。山室拓矢君（滋賀県立高島高校３年生）が参加者代表の追悼文を読む。

ホタル館富家食堂・・・特攻隊員たちの最後の憩いの場所となった知覧の食堂で、まかないの鳥濱トメさんの親身になって死にゆく者たちの世話をした話に涙をそそる。

比島戦没者慰霊の碑・・最大の戦死者をだしたフィリピン兵士の霊を慰める碑。

万世特攻平和祈念館・・知覧の補助飛行場で２０１人の特攻兵士が帰らぬ人となった。関係資料を展示。

桜島、開聞岳、維新ふるさと館等を見学して、地理・歴史の学習も行う。

学習態度良好で、みんな熱心に説明を聞き、メモをとり、平和学習を十分に修めることができた。トラブルもなく、みんな仲良くわきあいあいと３日間を過ごすことができた。

（次世代活動委員会　委員長　北村哲雄）

大東亜戦争を知る

竜王町立竜王小学校6年生　松村萌絵

私にとって『戦争』とは、あまりにも遠い、まるで物語のような別世界のことでした。でも、確かに日本は67年前、世界を相手にする『大東亜戦争』をしていた。その事実をこの戦跡訪問で改めて突き付けられました。

中でも敵艦に、飛行機もろとも体当たりするという『特攻隊』は、私に大きな衝撃をあたえました。命は無い、そう分かっていながらも特攻隊に入る。そんな事、私にはとてもじゃないけどできません。しかもその特攻隊員には、まだ17～18歳の少年もいたそうです。どんなに怖かっただろう、痛かっただろう・・・。私には計り知れません。でも、写真の中の隊員さん達はみんな笑っているのです。明日、突撃するのに笑顔なのです。それに、特攻隊にはみんなが自ら志願したと聞きます。どうして笑顔でいられたのでしょう。志願できたのでしょう。自分が突撃して少しでも敵を倒せば日本が、家族が助かるかもしれない。きっと、そう思うことで志願してきたのではないでしょうか。笑顔でいれたのではないでしょうか。

そして遺書。見るとみんな、家族への感謝の気持ちを一心につづっています。でも、今のわたくしはどうだろう。本当はもっと感謝しなければならないのに、すぐに文句を言ってしまいます。特攻隊の人達は、親孝行したくても自分は戦場にいるので出来なかった。でも私は違います。それなのに、出来ていないのです。

私はまだ子どもなので、戦争をどうとかそんな大それたことはできません。でも、小さなことでもできることはあります。一つは、忘れないこと。あの戦争で多くの人が傷ついたことを、特攻隊のような部隊があったことを、決して忘れません。戦争を二度とやらないようにするためには、忘れるのではなく、戦争がどんなにいけないことなのか、ちゃんと知らなければならないと思うからです。もう一つは、家族や地域の人達への感謝の気持ちを、いつも持つこと。これは戦争とは関係ないようにみえますが、私は大事だと思います。特攻隊の人達は、もっと親孝行すれば良かったと後悔しました。だから、私はそのこと、学んだことは一生忘れません。

加世田万世特攻平和祈念館を見学研修する皆さん

思いが深まった平和学習

近江八幡市立安土小学校6年生　窪内菜々美

多くの犠牲者をだした沖縄戦。今思うと、とても悲しい出来事だったと思います。沖縄戦の残酷な過去を知るきっかけとなった平和学習。たくさんの事を2泊3日で学びました。

沖縄の地に降り立った、2日目に近江の塔へ行きました。現在の近江の塔に至るまでの間、今よりも小さい塔が戦後3年後ごろに、建てられていました。近江の塔には、滋賀県の兵士が沖縄で戦死したり、病にかかり、亡くなった人々の名前がかかれていました。その近江の塔で慰霊祭が行われました。近江の塔の前で黙祷をしようと目をつぶった瞬間、戦場の様子が、頭の中に思い浮かびました。助けを呼ぶ声、爆発音、人々の苦しむ顔が、今、目の前で、起こっているかのように・・・。私は、その時に強い決心をしました。それは、この亡くなった人たちの分まで生きようということです。そして、私たちにある長い時間を使って、戦争時代の事を伝えていくということです。

人々が、困難の中逃げた糸数アブチラガマでは、軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属され、ガマの中は600人以上の負傷者で埋め尽くされました。治療をする人数に対し、負傷者、重傷者の人数の方が多く、助けるにも助けようがありませんでした。亡くなっていく人々は、「天皇陛下バンザイ」ではなく、親のことを思い亡くなっていったそうです。そんな、悲しみを背負った糸数アブチラガマには、とても悲しく、とても残酷な場所がありました。その場所とは、もう助からない人たちを入れ、放置していた所です。その恐れられていた場所には、光が入ってくる所などなく、希望を失い、そこにいた治らないと思われる人たちは、全員亡くなりました。「親に二度と会えない」「家族に会いたい」という気持ちを持ち、亡くなるという最後を迎えるとしたら、私は、きっとたくさんの後悔と家族の愛しさを胸に亡くなると思います。

沖縄戦が起こったなんて感じさせないくらいの景色だけど、被害にあった場所を見てみると「沖縄戦は、やっぱり、この場所であったんだ」と確信することが、たくさんありました。

この2泊3日で、生涯忘れてはいけないこと、それは、未来を生きていく私たちが、子孫や、戦争のことを忘れようとしているこの世の中に、戦争の恐ろしさを広めていくことです。そして、この平和学習を一緒に学んだ新しい友達との友情は、例え、会わなくても一生忘れないでおきたいです。一番忘れてはいけないことは、「二度と戦争をしてはいけない」ことです。

さざなみ

おかあさんを訪ねて

■百歳に乾杯

守山市　南しかさん

「しかさん　今日は！」と訪ねると、100歳の年輪を刻まれたにこやかなお顔で目線は獅子舞のかまど払いに向けられている。「百歳おめでとうございます」と手をさし出し握手する。立ち上がり獅子舞に頭をかまれ無病息災を願われる。

杖を頼りとは言え、足腰もしっかりされ、耳も聞こえ「眼はぼやけてデイサービスでも物作りはしやせん」と、はっきりとした口調で戦後を思い出し語ってくださる。「牛使いをしながら田んぼを守り、大根売りに娘にも学校を休ませてリヤカーの先引きをさせ苦しいどん底の生活であった。やっと落ちついたと思ったら頼りにしていた娘の主人を失った。その悲しさは、32歳で夫を戦争で亡くした気持ちが分かるだけに、それ以上に辛かった。去年、白寿の祝いをしてくれたが世間がまだ生きはると思われるので医者には行きたくない。娘が喧しく言うので行くが、医者に『往生安楽国の薬が欲しい』と、頼んで叱られている。苦労ばかりの娘にこの上長生きして苦労させると思うと可哀想で・・・」と、心痛を何回も口に出される。100歳になっても子を思う親の心に変わりない気持ちが溢れている。

どうか、もうしばらく母娘で残された時間を健やかにお過ごしください。と祈りつつおいとまする。

（広報　大西美智子）

追伸

お元気で過ごされていた南しかさんが、5月21日急逝されました。この記事を読んでいただけずに残念です。心よりご冥福をお祈りいたします。

より良い遺族会活動を目指す

豊郷町遺族会

戦後67年が経過した今日、私たちは、日々の暮らしの中で「戦争の悲惨さ」と「幾多の尊い命の犠牲によりもたらされた平和の尊さ」を忘れ掛けているのではないでしょうか。

今日の平和と繁栄は、先の大戦による多くの戦没者の礎の上に築かれていることをあらためて認識し、子どもや孫、曾孫達に語り継いでいかなければなりません。このためにも、遺族会の活動は、より活発に、多くの皆さんが参加し、継続していくことが大切です。

自転車で県内忠魂碑参拝の國松善次氏を迎える豊郷町遺族会役員。左から中村久雄氏、田中治氏、右端は森田年秋氏

豊郷町遺族会では毎年5月に「平和祈念ならびに戦争犠牲者追悼法要」を豊郷町社会福祉協議会と共催で行っています。当日は町長はじめ町議会議長、遺族会員のみならず福祉団体の方々にもご参加をいただき、豊郷町内ご住職6名の皆さまにより厳粛荘厳な法要を務めていただいています。また、豊郷町内忠魂塔の清掃作業はじめ滋賀県護国神社の例大祭や滋賀県遺族会スポーツの集いには多くの会員が参加しています。特に、春秋の滋賀県護国神社例大祭の後は、多賀大社で参加者全員がご祈祷を受け、参集殿で昼食をいただきながら会員相互の親睦を深めています。

平和祈念並びに戦争
平和祈念ならびに戦争犠牲者追悼法要で挨拶する豊郷町社会福祉協議会谷口瑞明会長

急速に進む少子高齢化や会員離れ等々課題もありますが、豊郷町遺族会としては、滋賀県遺族会の諸活動に積極的に参加し、地道ではありますが、会員一同協力しあいながら、力を合わせてより良い遺族会活動を続けて行きたいと思います。

（豊郷町遺族会　前会長　田中　治）

地域で平和学習実践を

近江八幡市遺族会

今年3月にオープンした滋賀県平和祈念館は、基本理念に「モノと記憶の継承」「自らできることのきっかけづくり」を掲げています。

近江八幡市遺族会女性部では、昨年9月三上いり江さん（満73歳）が、近江八幡市立北里小学校6年生2クラスの子ども達に修学旅行前平和学習として、戦時中の食べ物（サツマイモ飯と大根飯、すいとん）の調理実習と当時の暮らしについてお話をされ、さらに次の手紙で戦争の悲惨さを伝えられました。

＊＊＊＊＊

6年生の皆さんへ

調理実習する三上さんと北里小学校のみなさん

不慣れで皆さん分かっていただけたかなあと不安でしたが食べ物の出来上がりは昔のようにできて良かったです。顔も知らない父ですが手紙に「我が子の顔が見たい」や「娘（私）に気をつけて育てて家内仲良く暮らしてください」など書いてあり、あらためて戦死の現実を思い返しました。いつ死ぬか分からない戦地で手紙を書いた父が本当に可哀想で、心が張り裂けそうになります。戦争がなければと何度思ったことでしょうか。私も戦没者遺族会から父の戦地（中国）へ慰霊巡拝に行きました。全国の多くの方が苦労された現実は今も残っています。私は明るく楽しいことが好きです。良いことも悪いことも自分が発信しているということをいつも思いながら行動しています。「自分さえ良かったら」と思うのは一番惨めで淋しいことだと思います。助け合い思いやりを大切にしてください。

三上いり江

＊＊＊＊＊

木村芽久美先生からのお礼のことば

自分たちのふるさとである北里の戦時中の暮らしを知ることから始め、日本全体の様子や苦しい暮らしについて学ぶ学習へと展開して行きました。10月の広島への修学旅行では、原爆の悲惨さに直にふれ全員で平和の誓いをしてきました。帰校後も平和について考え、身近な平和実現に向けて自分ができることを考え、実行していこうと子ども達なりに励んでおります。戦争を体験していない私たちにとって、戦争について学び考えることは容易ではありません。そんな中、お忙しい時間を割いて、学習のためにならと快くご講義の依頼を引き受けてくださり、大変分かりやすくご教授くださいましたこと、心より感謝申し上げます。

苦しく辛かった時代を逞しく生きぬいてこられた三上様の体験談や子ども達への激励メッセージは、学習の枠を越えて子ども達の心を揺さぶり、こどもたちに感謝する心、一生懸命になることの大切さを考えることに向き合う機会を与えてくださいました。これからも引き続き学習に取り組み未来の北里や平和の担い手として自覚を育てて行きたいと思います。ありがとうございました。

＊＊＊＊＊

子ども達からもお礼のメッセージを沢山お受け取りになりました。

身近な地域で平和学習を実践しようではありませんか。

（近江八幡市遺族会　女性部　永福峰子）

近江八幡市立北里小学校子ども達からのメッセージ（三上いり江さん宛）

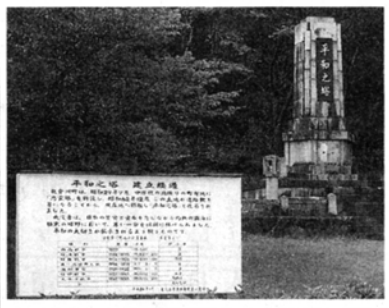
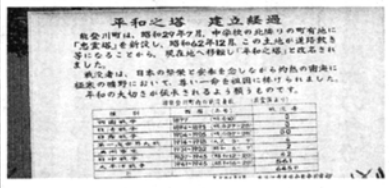
「平和之塔」看板新設

東近江市遺族会能登川支部

昨年11月の滋賀県戦没者遺族大会における國松善次滋賀県遺族会顧問の特別講演を聴き、東近江市遺族会能登川支部では、「平和之塔」建立経過の看板新設を役員会で検討協議し、関係先の協力を得て今年3月完成しました。

國松顧問は、今後の課題のひとつに「忠魂碑」「忠霊塔」という言葉と意味を知らない人が多くなっており、誰にでもわかる説明板の設置を急ぐ必要がある、とのことでした。

滋賀県平和祈念館の開館と相俟って、能登川町のみなさんがこの看板を見て、郷土の戦没者を偲び、平和の実践に邁進していただけるものと期待しています。



新たな看板を新設した平和之塔

【看板内容要旨】

能登川町は、昭和２９年「忠霊塔」を新設し、昭和６２年には道路拡幅に伴い移転して「平和之塔」と改名されました。

戦没者は、日本の繁栄と安泰を念じながら灼熱の南海に、極寒の曠野において尊い一命を祖国に捧げられました。

平和の大切さが伝承されるよう願うものです。

西南戦争	明治１０年	３柱
日清戦争	明治２７～２８年	３柱
日露戦争	明治３７～３８年	３０柱
第１次世界大戦	大正３～７年	４柱
満州事変	昭和６～７年	２柱
日中戦争	昭和１２～２０年	４２柱
太平洋戦争	昭和１６～２０年	５６１柱
合計		６４５柱

野洲忠魂碑の改修を終える

野洲市遺族会

野洲忠魂碑は、かつては旧野洲西小学校の校庭にそびえ立っていましたが、終戦と同時にグラウンドの片隅に埋没されました。その後、小学校の増改築に伴い当時の野洲町長（故人）や関係者が協議を重ね、掘り起こして移設を計画。昭和51年に国道8号線沿いの山麓に移設、再建立されました。以後、野洲市遺族会野洲支部で慰霊参拝と維持管理を行ってきましたが、山裾でイノシシの被害により石垣、土盛りの傷みが後を絶たず、手の施しようがない状態となっていました。このため、早くから改修の声が高まり、野洲支部の大きな懸案事項となっていました。また、一昨年には、滋賀県遺族会顧問の國松善次氏が県下の忠魂碑を自転車で巡拝され、すべての碑について考える弾みを受けることとなりました。

このため、野洲市遺族会の森宗三郎会長が多年にわたり野洲市当局と事前協議を重ね、改修の目途がつき、野洲市長や関係機関のご理解をいただき、遺族会員の要望に応えての改修の運びとなりました。

本年1月に安全祈願祭を行い、続いて3月には、山仲善彰野洲市長や市議会からは田中良隆議長、奥村治男副議長や野洲市社会福祉協議会の藤澤善成会長のご列席をいただき、野洲市遺族会役員と野洲支部からも大勢の会員出席のもと竣工式を斎行いたしました。

ここに、見事に甦った野洲忠魂碑の末永い慰霊行事実施と維持管理の徹底に努めることを誓い、関係機関や遺族会員のご協力、並びに、工事に従事し奉仕いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

（野洲市遺族会野洲学区支部長　川端藤和）

野洲支部忠魂碑改修工事の竣工式（平成24年3月）

故兼子久司さんの思いが平和祈念館に届く

高島市遺族会

故兼子久司さん（滋賀県遺族会副会長、高島郡遺族会連合会会長就任中の平成13年11月1日に逝去）は生前、県民の戦争体験を語り継ぎ、戦争の悲惨さや平和の尊さを学ぶ施設の必要性について熱っぽくその思いを語っておられました。兼子さんは何事にも一途な性格で、戦争の記録が風化され、戦争にかかわる遺品がどんどん失われていくなかで、いま遺品を集め残しておかないと取り返しのつかないことになると、悲壮感を漂わせて遺品集めの呼びかけをされていたことが思い浮かびます。

遺族会に関係する多くの人たちにそれらの遺品を見ていただける施設の構想についても夢中になって話されていたことが深く心に残っています。

このたび、兼子久司さんの夫人、利子さんは「平和祈念館にかけた夫の思いを私なりに共有したい」と、寄付を思い立たれました。「平和祈念館の事業に夫の思いを活かして欲しい」とのことです。利子さんから寄付のお申し出があり、滋賀県遺族会角野彰夫事務局長と共に訪問、ご子息兼子徹さん名義の寄付金10万円を預かり、滋賀県平和祈念館設置県民募金実行委員会へ取り次ぎました。

（高島市遺族会　竹井昌夫）

在りし日の兼子久司さん

靖国参拝応募作品

俳句

奥野　きぬ・選

靖国の新雪に心引きしめて
若き日の父との旅や春の夢
（高島市）前川正男

会ひたさに今年も花の靖国へ
奥殿に冷えし手合わせ父偲ぶ
（日野町）岡　俊郎

報告は九段の父へ春の雪
幻の父に逢う旅梅薫る
（米原市）藤田紀代

靖国の父の思ひでひなまつり
靖国の父と語りし春近し
（草津市）福井敏子

靖国の父に見えん春の旅
（彦根市）北川賢一

靖国の父に届けん花だより
（愛荘町）吉岡太一郎

靖国の父に会いたし古希の春
春遠し社の桜はねず色
（竜王町）大西初枝

英霊のやしろの庭に残り雪
春浅き小諸城趾に傘の花
（彦根市）廣松隆也

故郷を思い出させる宮の雪
（高島市）岸田孝一

【総評】

今年も昨年に続き俳句の選をさせていただく光栄に預かり恐縮いたしております。少し俳句を嗜んでいるというだけでお役を引き受けることになりましたが、私も遺族の一員といたしましてお役に立ちたいと厚かましくもお引き受けさせていただきました。

俳句は季語が大切と教えられておりますので、その点を重視させていただきました。

年一度と言わずお暇なときに一句でも二句でも詠まれたら如何でしょうか。

短歌

母坪みち代・選

昨年度に引き続き今回も、滋賀県遺族会靖国神社参拝の旅「短歌」「俳句」を募集したところ、多くの皆さんから感動の作品を寄せていただいた。短歌選者、俳句選者それぞれから添削と総評を受け、今回と次回（平成24年10月発行予定）に分けて掲載する。なお、応募作品に添えて感動のメッセージも届けていただいたので紹介する。

（広報委員会）

父が呼ぶ声なき声の靖国へみたまの前
故うれしい語り
（彦根市）中川誠治

松代のしのぶ地下壕福島のせまる原発
のちの世までも
（彦根市）辻　俊子

靖国のこの場に眠るわが父に安らかな
れとこうべを下げむ
（彦根市）中村　正

顔知らぬ父と話せる靖国の社殿の前で
ひたすら祈る
（彦根市）中川誠治

国治む首領ら背きし靖国に祀られし霊
の思いやいかに
（彦根市）中村　正

来るたびに願い届けと靖国の平和の砦
永えならむと
（彦根市）中村　正

父らみな清熱血と称う宮箒目のみが
寒々として
（愛荘町）土田幸夫

五百児の列行く宮の回廊に軍足が合し
残雪を打つ
（愛荘町）土田幸夫

いく度の春は来たれど変わらぬは父の
眼ざし切ない思い
（米原市）桂田孝子

色あせし遺影は語る幸あれと靖国の杜
に風花の舞う
（米原市）桂田孝子

残雪の社に遺児等頭垂れ面影偲ぶ涙の
祭文
（長浜市）長谷川順二郎

舌切の雀に学ぶ人の世の道は昔も今も
変わらず
（長浜市）長谷川順二郎

はるかぜややすくにまいりおごそかに
おきてはならぬいのりとともに
（彦根市）中山　薫

やすくにへあしをはこびてしみじみと
くにににつくししごせんぞいたむ
（彦根市）中山　薫

遊就の館に並ぶ武器を観て自ずと祈る
世界の平和
（東近江市）中村健二

昇殿の参拝叶い目がしらに神なる父の
面影うかぶ
（東近江市）中村健二

【総評】

歌を読ませていただいて、作者おひとりお一人のお気持ちを感じ勉強させていただきました。

短歌は短いことばで微妙な気持ちを表現します。ことばの数の制限があるので、ことばを入れ替えたり順序を変えたりしてみます。

人がどのように読んでくれるかを確かめながら歌をつくっていくうちに、ことばの関係など身をもって体験し気付いて行くものだと思います。

私は、辞書を3冊ほど手元に置いて歌を作りますが、語の正確な知識を必要としますし、まだまだ不勉強で添削なんて恐れ入ります。

これからも、その都度メモを忘れないで短歌づくりをしていただきたいと思います。

拝啓

あのいまわしい東日本大震災から早一年が経過しましたが、一日も早い復興を願うばかりでございます。

平素は、県遺族会のために日々ご精進いただいておりますこと、心より深謝申し上げます。

この度の靖国神社参拝と磯部温泉の旅には家内共々参加をさせていただき、色々と大変なお世話になり有意義な楽しい旅をさせていただきました。お陰様で、かねてより念願の靖国神社昇殿参拝をさせていただきありがとうございました。

私事ながら、生後50日して別れた父及び二人の叔父の3柱の御霊の前に額ずくことができましたこと、本当に有難く感謝の念で一杯でございます。この感謝の余韻さめやらぬ内に不得意ながら短歌をしたため応募させていただきました。

「年に一度は靖国へ」とのお言葉に甘えて、また、来年も家内と参加させていただきたいと願っております。

いよいよ年度末を迎え、何かとご多忙のことと存じますが、皆様のご活躍をご祈念申し上げ、お礼のことばとさせていただきます。ありがとうございました。

敬具

東近江市　中村健二